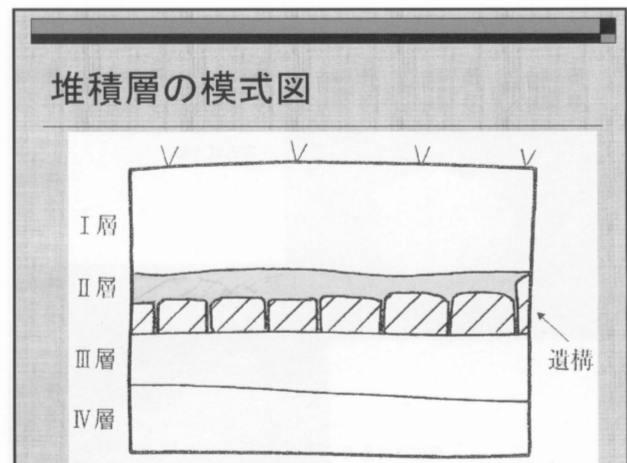
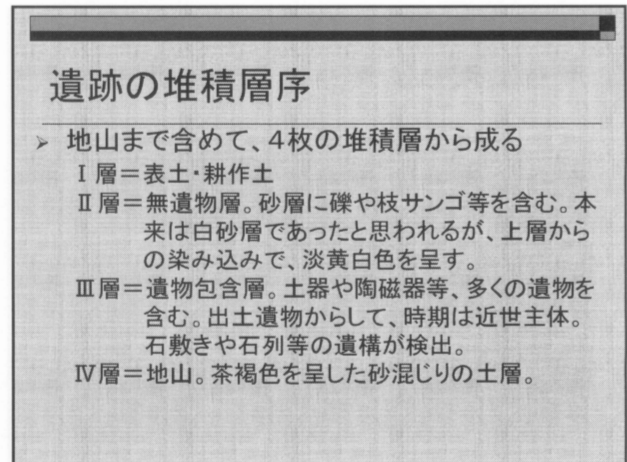
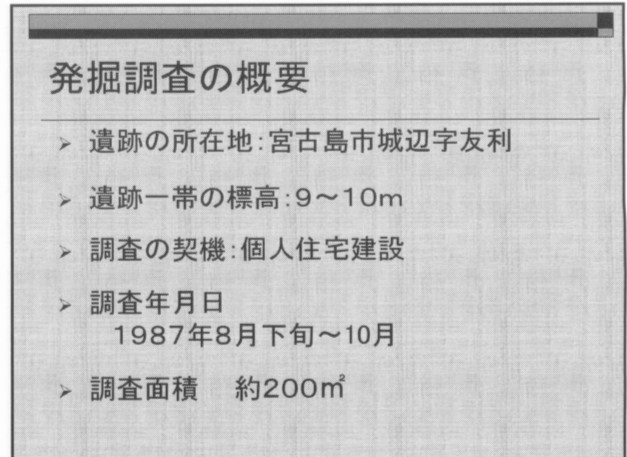
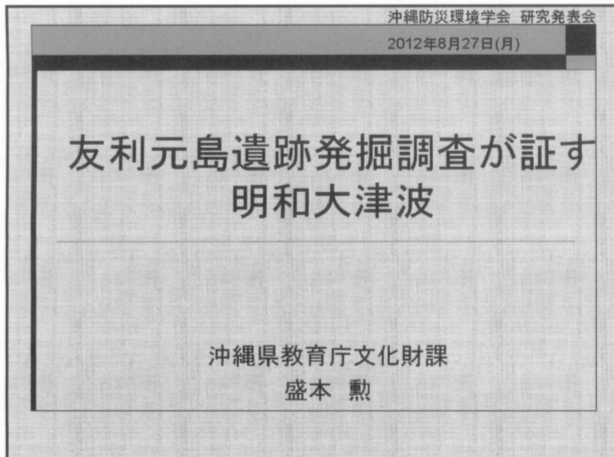


琉球大学学術リポジトリ

資料 友利元島遺跡発掘調査が証す明和大津波

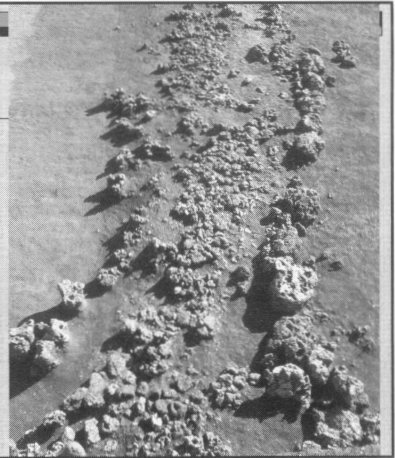
メタデータ	言語: 出版者: 沖縄科学防災環境学会 公開日: 2022-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 盛元, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019390



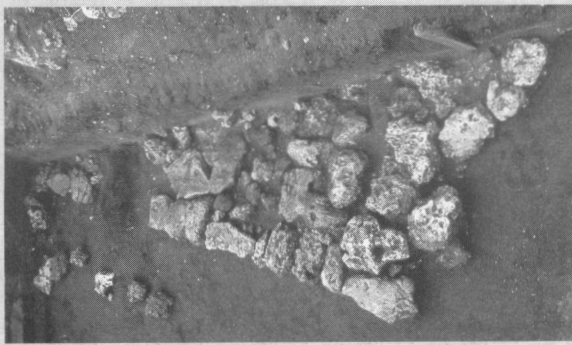
検出された遺構

- 石敷遺構 2基
 - ・石敷・1
 - ・石敷・2
- 石列遺構 1基

石敷遺構・1



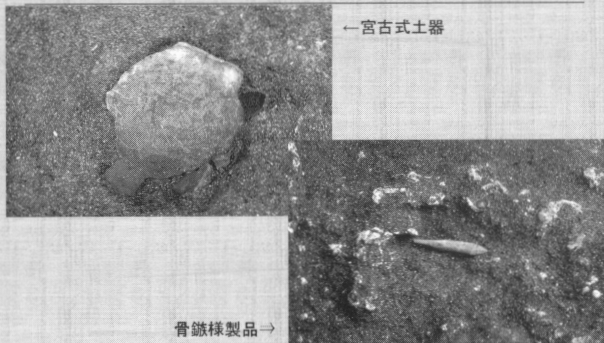
石敷遺構・2



石列遺構



遺物の出土状態



出土遺物

- 土器
- 中国産陶磁器
- 沖縄産施釉陶器
- 沖縄産無釉焼締陶器
- 鉄片
- 古銭
- 骨製品
- 食料残滓(獣骨、魚骨、貝類など)

II層・黄白色砂層の検討・1

- 特徴:人工品としての遺物は皆無＝無遺物層。若干の自然貝を含むが、殆んどがローリングを受け、磨滅。
- いかなる現象によって堆積したか。
⇒人為・自然の両面から検討
- 結果:調査地点より125m程離れた海岸砂丘より何らかの作用によって打ち上げられ、III層の遺構及び遺物包含層面に被覆した自然堆積と結論

II層・黄白色砂層の検討・2

- 何らかの作用とは？
- 砂層中に海蝕台などに棲息するイボタマキビガイ等の食料としては採るに足らないような微小貝が含まれていることが貝類学者の安谷屋昭氏の教示によって判明。
- これらの貝類は、その生態上、岩礫等に張り付いた状態で棲息

II層・黄白色砂層の解釈・3

- これらの貝は、磨滅を受けていない。ローリングを受けた貝との区別は明確。
- 安谷屋氏によれば、このあり方は何らかの強い衝撃によって、瞬時に運ばれたのであろう解釈。
- 強い衝撃というのは、津波等である。
- 同様な砂層のあり方は、調査区西側を南北に走る県道拡幅工事に伴った城辺町教委による発掘調査でも確認。

まとめ

- 遺跡の時期 ⇒15～16C代の遺物も若干含むが主体は17～18C
- 遺構及び包含層上面に堆積した黄白色砂層は津波等の強い衝撃によって運ばれ、被覆した。
- II層・黄白色砂層の被覆した時期等を検討した結果、乾隆36年卯年・明和8年3月10日(1771年4月24日)に宮古・八重山一帯に襲来した「八重山地震津波」、所謂「明和大津波」によるものであろう、との結論に至った。

今後の課題など

- 発掘調査やボーリング調査等による浸水域範囲の把握
- 類似遺跡における追認
砂川元島遺跡(城辺)、宮国元島遺跡(上野)、新里元島遺跡(上野)など
- 関連諸科学との共同調査
文献史学、地質学、地震工学、貝類学、etc